

発達に偏りのある子どもの 気持ちに寄り添うとは

発達に偏りのある子どもたちは

発達に偏りのある子どもたちは、日常、いろいろな困難に出会います。偏りがあるということは、ある面では定型発達（年齢相応の発達をとげ、得意不得意の差も大きくない）の子どもと比べて、同等あるいは高い能力を持ち、またある面では年齢相応のことができないなど、その振る舞いが周囲に理解されにくいのです。

もちろん、平均的であることを前提にした対応を否定しているわけではありません。たとえばこんなふうに思うことは誰にでもあります。

「おしゃべりには困っていないのだから、作文も書いて当たり前」

「数学が得意なのだから、英語も努力すればできるはず」

「勉強ができるのだから、常識をわきまえるべき」

「自分の痛みを声高に言うのだから、相手の傷つきにも繊細であってほしい」と。

最初から偏りがあることがわからなくても、この平均的な対応をして、うまくいかないのであれば、偏りを想定して支援を開始すればいいのです。

なぜ気持ちが汲めないのか

いくつもの困難のなかで偏りのある子どもたちの多くが直面し、支援者が苦勞するのは、人の「気持ちを察する」ことや、その結果、可能になる「気遣う」ことについてではないでしょうか。また、そもそも自分の気持ちを言えないことによつてトラブルになつてしまつたり、めごとのあと、支援する教師や保護者が気持ちを聞いても答えられないこともしばしば起こります。

気持ちをとらえる力は、家庭や学校で教えられて身につくというより、社会生活を送るなかで自然に育まれていくものです。このことも、偏りのある子どもたちには、二重の責めを負わせます。

感情への気づきや感情表現など、多くの子どもが自然に習得していくものは、

自然に身につけるべき内容も、タイムミン
グも、方法もわかりにくい。ため、偏りの
ある子どもたちには身につけにくいので
す。

それは、目に見えないものはとらえに
くいという特性や、場によって変化し、
公式化しにくいものはとらえにくい傾向
があるためです。当然のことながら、自
分の気持ちも人の気持ちも見えません。
また、同じ人でも場面によって変化しま
す。同じ場面でも人によって異なる感情
を抱きます。このように可視化や公式化
がされにくいものなので、察して気遣う
ことや、場にに応じて振る舞うことができ
にくい状況が起こるのです。

加えて、大人も教えられた経験がない
ので、伝え方、育み方がわかりません。
そればかりか、自然に身につけて当たり
前と思うほど、「なぜ、こんなこともわか
らないのか」と嫌悪感や苛立ちを覚える
人さえいます。

感情は育てるもの、 寄り添うと言いつても

この本は、支援する教師や保護者が、
この扱いにくい感情をどう教えていくか
について考える材料を提供します。感情
は、育てなければ育たないものです。ま
ず、見えないものを見る形にし、自分
のなかの感情をとらえ、人と比べて違う
自分を見えやすくします。そして、他者
の感情を推察する力を育んでいきます。
これらを基盤にして、ようやく人とわか
わるスキルの育成となるのです。

「寄り添う」とは、子どもの気持ちを汲
み、それに共感するかわりです。しか
し、周囲からは受け入れにくい行動をと
った子に、支援者が「そうしたかったん
だよね」「怒ったから殴ったんだよね」と
肯定できるでしょうか。

ここに、行為は指導し、感情を汲みと
るかわりが求められるのです。

「手が出ちゃったんだね。それは、よく
ないよね。それだけしんどかったんだね。
次、どうできそう？」

「自分もやりたいって気持ちだったんだ
ね。割り込んじゃったのはどう思う？」
と。

しかし、他の子どもも見ているなかで
指導することが多い教師は、気持ちを汲
むよりも、行為の善悪を指導しやすい傾
向があるのかもしれない。

仮に、共感性の高い教師でも、「やりた
かったんだよね」と受容し続けていくこ
とで、この子は成長するでしょうか。

多くの人は、受容されることによって、
わかってもらえた安心感から心にゆとり
が生まれ、本当にこれでよかったのだろ
うかと洞察を始めます。しかし、偏りの
ある子どもの場合、自分のとりうる行動
選択は限られ、他の人だったらこう振る
舞うかもしれない、周囲からはどう受け
止められるだろうかなどと想像すること
が難しいのです。受容されることによっ
て、逆に「確かに自分はやりたかったん
だ。だから私は悪くない」と反芻しなが
ら、確信を深めてしまう可能性があります。

「本当に悪くないのか」

「他の人でもこういうことはあるのか」
「周囲に自分はどうか映っているだろうか」

という吟味ができる状況にない場合、洞察は深まりにくいでしょう。

感情に焦点を当てるかかわりにおいても、子どもの認知の偏りを考慮しないと、受容共感によって、支援者が意図していないのに、行動が容認されたと感じ、思い込みを強めてしまうことさえあるのです。

周囲の子どもたちの理解にも

また、偏りのある子どもたちへの支援ができて、その多くは集団場面です。したがって、周囲の子どもたちからは「どうして、同じようにできないの?」「どうして僕たちと違うお手伝いをするの?」という声が聞こえてきます。

それに応えるために、障害の説明をする必要を考える人もいるでしょう。でも、本当にそうでしょうか。

障害理解として扱うか、多様性をとら

える大事な機会とするかがわかります。

子どもたちは、違いを理解したいのです。そして共生社会とは、多様な価値観を知り、それを受け入れていく過程で成熟していくものです。

食べ物の好き嫌いがあるように、見え方も感じ方も違う、その溝をどう埋めていくかを考えていける子どもたちを育てていく必要があるのです。

その説明の大きなヒントも込められています。

